第 517 号
2026 年 10 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 539 回(2026 年 10 月 15 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:10 人
時間:10:00～11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『異聞今昔物語 話を集める少年と消えた少女』 森谷 明子／作, 佐竹 美保／絵 偕成社

10月は、『異聞今昔物語 話を集める少年と消えた少女』を読みました。平安時代、荒れた都で逞しく暮らす少年・草太は、古今東西の話を集めている年老いた僧に出会います。平安時代の説話集『今昔物語集』の話をちりばめた、あらたな物語です。次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●『今昔物語集』は、子どもから大人まで世代や時代を越えて読むことができる本。私は大人になった今だからこそ、内容を深く理解できた。パソコンや AI が発達した時代での本の役割について、考えさせられた。

●文章が読みやすくて、面白かった。掲載されている『今昔物語集』の説話の中で、「国主が谷に落ちた話」・「稲荷にお参りして災難にあった舎人の話」は知っていた。その他にも自分が知らない説話も多くあり、楽しく読むことができた。

●『今昔物語集』と「少年少女の成長物語」の2つの話の構成バランスが上手だった。作中の僧侶の存在は大きい。当時は紙・筆が高級品だった。口伝で後世に物語が残ったことが面白い。主人公は孤児の少年だが、最終的に良い結末を迎えたので、読んでいてほっこりとした。文章は読みやすく、広い年代で楽しめる本だと思う。

●杉本苑子の『今昔物語ふぁんたじあ』は面白いのでオススメ。芥川龍之介の『芋粥』などの作品は、『今昔物語集』の内容を元に書かれているそうだ。本は読めば読むほど、自分が知らないことがいっぱいあるということに気づかせてくれる。

●「異聞」という言葉が気になった。子どもが僧侶に語るために新しい話を集める方法が興味深かった。この物語を読んで、人と人が喧嘩別れをするのは損だと思った。草太と千萱や人々の交流から、人との対話の大切さを感じた。

●『今昔物語集』は、子どもの頃から苦手意識があった。今回の本は、草太と千萱の淡いラブストーリーもありつつ、説話と交えたミステリー要素もあるのが上手い。佐竹さんの挿絵もこの本によく合っている。p.209の「人が生きている限り、この世のどこでも、話は続いていく。」という言葉に共感した。自分が今まで楽しんできた作品のベースに『今昔物語集』があったことに改めて気づかされた。

●『今昔物語集』は仏教色が強い内容で、『宇治拾遺物語』は世俗的な内容。口承文学としては『古事記』が 1 番古い。草太や千萱が自分の手持ちの話を取引の材料に使っている場面は、これが彼らの生きる知恵なのだと感じて、印象に残った。

●今回の課題図書は、『ホビットの冒険』より読みやすかった。『今昔物語集』は、口伝えで残ってきた説話集。やはり語りを生で聞くということは、物語を本で読むこととは違う価値があるのではないだろうか。

●当時は文学の中で取り上げられることの少なかったであろう僧侶や武士や農民の話がたくさん出てきて、興味深く読んだ。知っている話も多かったが、「もののけを追いだした宰相の話」は、初めて読んだ。p.119 には、縁側をぞろぞろと歩く小さなもののけの姿が佐竹さんの挿絵で描かれており、可愛らしかった。

●今昔物語を作中作という形にし、違和感がないように組み込まれていて効果的だった。作中作の中で「六の宮の姫君の話」は刺さった。待つだけで自分からは行動を起こさなかった姫君の姿に、考えさせられるものがあった。文字を読めなくても書けなくても、口で語ることでお話を楽しむことが出来る。話を集める僧が、言葉も話も口にするそばから消えていくと言っているが、自分自身も日々の生活の中で言葉の儚さを感じるようになり、この時代と違って誰もが文字で言葉を書き残すことの出来る今は、すごく幸せなことだと思った。

次回 11 月 12 日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室
📖『サンサン』 曹 文軒／著, 中 由美子／訳, 和歌山 静子／画 てらいんく
※11月は「世界の本の読書会」です。申込み・参加費は不要です。